

D-8

ドイツ語の感嘆文の形式意味論による分析

伊藤克将 (日本学術振興会特別研究員 PD / 上智大学)

k-ito-5g3@sophia.ac.jp

ドイツ語の感嘆文には、VL (verb-last) 語順および V2 (verb-second) 語順の両方を許すものと、VL 語順のみを受けつけるものが存在する。本発表ではまず、VL・V2 語順共に許容する感嘆文は「程度 degree」の意味を真理条件として持つ一方、VL 語順のみを許す感嘆文に関してはその限りではないことを示す。そしてドイツ語では節の命題が主張 assertion になり得る場合に V2 語順が認可されるという先行研究における指摘を受け入れた上で、VL・V2 語順共に許容する感嘆文は命題 proposition を指示 denote しており、主張 assertion になり得るため V2 語順が認可されているとする提案を行う。本発表の結論は、感嘆文は疑問文と同じく命題の集合 set of propositions を指示していると想定しつつ感嘆文に独自の発話力を認める多くの先行研究 (d'Avis 2001, Zanuttini & Portner 2003, Roguska 2007, Castroviejo Miró 2010, Repp 2013, Balusu 2019 など) の方向性に再考を促すものである。

1. はじめに

ドイツ語には様々な感嘆文が存在することが知られている (cf. Fries 1998, Rosengren 1992)。文頭が *wh* 句となっているものに限っても、(1)および(2)で示すようにその形式は多様である。

- (1) a. Wie klug er doch ist! (wie 'how'+形容詞感嘆文)
how clever he PRT¹ ist
彼はなんて賢いのだろう！
- b. Was für ein tolles Auto der gekauft hat! (was-für-ein 'what for a'感嘆文)
what for a nice car he bought has
彼はなんて素敵な車を買ったのだろう！
- c. Welch einen tollen Mann die geheiratet hat! (welch-ein 'which a'感嘆文)
which a nice man she married has
彼女はなんて素敵な男の人と結婚したのだろう！
- (2) a. Wen ich getroffen habe! (wen 'who'感嘆文)
who I met have
私が会った人には驚いたよ！
- b. Wo Peter gewesen ist! (wo 'where'感嘆文)
where Peter been is
ペーターがいた場所には驚いたよ！
- c. Was Maria trinkt! (was 'what'感嘆文)
what Maria drinks
マリアが飲んでいるものには驚いたよ！

(1)と(2)の感嘆文は V2 (verb-second) 語順に関して異なった振る舞いを示し、(1)の感嘆文は V2 語順を許す一方(3)、(2)の感嘆文は V2 語順を受け付けない(4) (cf. Rosengren 1992)。

- (3) a. Wie klug **ist** er doch!
b. Was für ein tolles Auto **hat** der gekauft!
c. Welch einen tollen Mann **hat** die geheiratet!
- (4) a. *Wen **habe** ich getroffen!
b. *Wo **ist** Peter gewesen!
c. *Was **trinkt** Maria!

¹ グロスにおける PRT は particle の略であり、話者の心的態度を表す心態詞 (独: Modalpartikeln) であることを示す。

ただし、(2)の感嘆文に関しては、*alles* ‘all’や*überall* ‘everywhere’を伴った場合、V2語順が認可される(5) (cf. Fujinawa 2011)。本発表では、これらの感嘆文を *w+alles/überall* 感嘆文と呼称する。

- (5) a. **Wen habe ich alles getroffen!**
who have I all met
私は誰にでも会ったなあ！
- b. **Wo ist Peter überall gewesen!**
where is Peter everywhere been
ペーターはどこにでもいたんだなあ！
- c. **Was trinkt Maria alles!**
what drinks Maris all
マリアは何でも飲むなあ！

ここで、なぜ一部の感嘆文でのみ V2 語順が認可されるのか、という疑問が生じる。次節ではまず伊藤 (2018) に基づき、「程度」の意味を持つ感嘆文 (degree 感嘆文) のみが V2 語順を受け付けることを示す。3 節では、ドイツ語では節が主張可能性 *assertive potential* をもっている場合に V2 語順が認可されるという先行研究における指摘を受け入れ、*degree* 感嘆文もまた主張可能性 *assertive potential* を持っており、それが V2 語順を認可していると提案する。4 節でこのことを経験的に支持するデータを提示し、5 節では分析として *degree* 感嘆文における *wh* 句に特殊な意味論を想定した上で、*degree* 感嘆文は (平叙文と同じように) 命題を指示 *denote* していると主張する。多くの先行研究 (d’Avis 2001, Zanuttini & Portner 2003, Roguska 2007, Castroviejo Miró 2010, Repp 2013, Balusu 2019 など) では感嘆文は命題の集合 *set of propositions* を指示しているとしているが、本発表における分析の方が経験的に優れていることを示すデータを 6 節にて提示する。

1. *degree* 感嘆文と *non-degree* 感嘆文

Rett (2011) は、感嘆文には程度 *degree* の意味を伴うものとそうでないものが存在することを指摘した。両者の違いは、(6)のような *non-degree* コンテキストにおいて発話可能かという点にある。

(6) *non-degree* コンテキスト (cf. Rett 2011:418)

Mary は John がかぼちゃパイとクリームブリュレを作ると聞いていたが、実際には John はチョコレートケーキとブルーベリーパイを作った。Mary はチョコレートケーキとブルーベリーパイに対して特に高い程度を伴う評価 (「とても珍しい」「作るのがとても難しい」など) をしていないが、John がこの二つを作るとは予想だにしないので驚いた。

- a. (Wow,) John baked those desserts!
b. #What desserts John baked!

Rett (2011) は (6a) のような文を *sentence exclamation*、(6b) のような文を *exclamative* と呼び区別している。本発表では、*non-degree* コンテキストで発話可能である「程度 *degree* の意味を真理条件として持たない感嘆文」を *non-degree* 感嘆文、*non-degree* コンテキストで発話不可である「程度 *degree* の意味を真理条件として持つ感嘆文」を *degree* 感嘆文と呼称する。

同様のテストをドイツ語の感嘆文に適用すると、(7)のような結果が得られる。

(7) *non-degree* コンテキスト

Peter が医者に行ったところ、偶然にもその医者が知り合いの Georg であった。Peter は、Georg に対して特に高い程度を伴う評価 (「すごい」「ひどい」など) を下していないが、偶然会ったことに驚いた。

- a. **Wen ich getroffen habe! (Der Arzt war Georg!)**
who I met have the doctor was Georg
- b. #**Was für einen Mann ich getroffen habe! (Der Arzt war Georg!)**
what for a man I met have the doctor was Georg
- c. #**Welch einen Mann ich getroffen habe! (Der Arzt war Georg!)**
which a man I met have the doctor was Georg

d.#Wen ich alles getroffen habe! (Der Arzt war Georg!)
 who I all met have the doctor was Georg

この結果から、*wen* ‘who’ 感嘆文は non-degree 感嘆文である一方、*was-für-ein* 感嘆文・*welch-ein* 感嘆文・*w+alles/überall* 感嘆文は degree 感嘆文であると言える。なお、紙幅の都合から省くが、*wo* ‘where’ 感嘆文および *was* ‘what’ 感嘆文については non-degree コンテキストで発話可能であるため (cf. 伊藤 2018)、non-degree 感嘆文であると言える。なお、(1a)のような *wie*+形容詞感嘆文は、常に形容詞²を伴うため、degree 感嘆文とみなしてよいであろう。そして、(3)~(5)を見ると分かるように、V2 語順は degree 感嘆文である *wie*+形容詞感嘆文・*was-für-ein* 感嘆文・*welch-ein* 感嘆文・*w+alles/überall* 感嘆文でのみ認可されている。よって、「degree 感嘆文は V2 語順を許す」という一般化が可能となる。次節では、ドイツ語における V2 語順の一般的な性質を取り上げ、degree 感嘆文との関連を指摘する。

2. ドイツ語における V2 語順

ドイツ語では、節に主張可能性 assertive potential がある際に V2 語順が認可されるということが、様々な先行研究 (Meinunger 2004, Truckenbrodt 2006, Antomo & Steinbach 2010, Reis 2013 など) で指摘されている。主張 assertion とは共有知 common ground に命題を加えることの提案であり (cf. Stalnaker 1978)、節が主張になりうるとき、その節は assertive potential を持つということになる。このことが観察される例として、まず補文が挙げられる。(8)で見られるように、*denken* ‘think’ のような態度述語 attitude predicate に埋め込まれた補文では V2 語順が可能であるのに対し、*überrascht sein* ‘be surprised’ のような事実性述語 factive predicate に埋め込まれた補文では V2 語順が不可である。これは、事実性述語の場合には補文命題が前提 presupposition になっており、主張 assertion にはなり得ないためである。

- (8) a. Ich denke, er **hat** es gegessen. / Ich denke, dass er es gegessen hat.
 I think he has it eaten I think that he it eaten has
 私は、彼がそれを食べたと思う。
 b. *Ich bin überrascht, er **hat** es gegessen. / Ich bin überrascht, dass er es gegessen hat.
 I am surprised he has it eaten I am surprised that he it eaten has
 私は、彼がそれを食べたことに驚いた。

他にも、話し手が疑問文を発した理由を述べる *weil* ‘because’ 節では V2 語順が許される(9)のに対し、疑問の一部となっている *weil* ‘because’ 節では V2 語順が許されない(10)。これは、疑問文を発した理由に関しては主張になり得るのに対し、疑問の一部分は主張にはなり得ないためである。

- (9) a. Bist du nervös? Weil du schon deine dritte Zigarette **rauchst**.
 are you nervous because you already your third cigarette smoke
 不安なの？だって君もう 3 本目のタバコを吸っているんだもん。
 b. Bist du nervös? Weil du **rauchst** schon deine dritte Zigarette.
 are you nervous because you smoke already your third cigarette
 不安なの？だって君もう 3 本目のタバコを吸っているんだもん。

(Antomo & Steinbach 2010: 19)

- (10) a. Bist du mir böse, weil ich gestern nicht bei deinem Vortrag **war**?
 are you to-me mean because I yesterday not at your talk was
 僕が昨日の君の発表に行かなかったから、君は僕に対して怒っているの？
 b. #Bist du mir böse, weil ich **war** gestern nicht bei deinem Vortrag?
 are you to-me mean because I was yesterday not at your talk

(Antomo & Steinbach 2010: 7)

²ここでの形容詞は副詞的用法も含む（ドイツ語では多くの形容詞が副詞的用法をもつ）。

なお、V2 語順となっているからと言って、節が常に主張として解釈されるわけではないことに注意されたい。例えば(11)は文の形式としては平叙文であり主張可能性があるため V2 語順となっているが、解釈は疑問である。

(11) Sie sind Arzt?
you are doctor
あなたは医者ですか？

つまり、V2 語順が可能であることは、あくまで節の形式に主張可能性あることを示しているのみである。

さて、ここまでの議論を踏まえると、ドイツ語における degree 感嘆文が V2 語順を受け付けるのは、degree 感嘆文に主張可能性ある (degree 感嘆文の命題が主張になり得る) からである、という仮説が成り立つ。そこで次節以降では、この仮説を経験的に検証していく。

3. 主張となっている degree 感嘆文

Degree 感嘆文の命題が主張になり得るとすれば、degree 感嘆文に対して *ja/nein* ‘yes/no’ で答えることが可能であるという予測になる。実際、(12)や(13)で示すように、degree 感嘆文に対して *ja/nein* ‘yes/no’ で答えているインターネット上の実例が存在する。(12)では *Wie schön!* 「なんてきれいなもの！」と言った Monika に対して Michael が *ja* ‘yes’ で応答しており、(13)ではアダプターの接続の仕方に関して Markus が *Welch eine schwere Geburt!* 「なんて骨の折れる仕事なんだ！」と発言し、それに対して Acer が *nein* ‘no’ の口語形である *nö* ‘nope’ で応答している。

(12) [Monika と Michael が谷底を見下ろしている写真と共に]

Monika: **Wie schön!**

Michael: Oh **ja**. Emmmm... Würdest du da runter springen?

Monika: Waaaaas?

Michael: Mit Fallschirm!

(<https://2mmedia.net/monika-wie-schoen-michael-oh-ja-emmmm-wuerdest-du-da-runter-springen-monika-waaaaas-michael-mit-fallschirm-monika-nc-%F0%9F%99%84-abgang-michael-%F0%9F%98%8E-photos-by-the-amazing>)

(13) [インターネット掲示板において]

Frage von Acer:

(...) ich hab das Forum durchwühlt, aber nix Passendes gefunden. Ich möchte analoge Bänder im VHS-Videorecorder über das Scart-Kabel mit meiner MV850i am Av-In stecken und (...)

(...)

Antwort von StefanS:

(...) Du benutzt den Adapter, der mit Deiner Kamera geliefert wurde. Dieser Adapter läßt das Signal nur in einer Richtung durch, nämlich...

Antwort von Markus:

Welch eine schwere Geburt!

Antwort von Acer:

Welch eine schwere Geburt! **Nö**, ich kam ganz gut raus ;-)

@Stefan

Danke, muss mir wohl nen anderen Adapter kaufen, ...

(<https://www.slashcam.de/info/Recorder--Cam--Av-In----Firewire----PC-136415.html>)

さらに、Trotzke (2019) による容認度調査の結果も、本発表の方向性を支持している。Trotzke (2019) はドイツ語母語話者 112 人を対象に、(14)のように感嘆文に対して *nein* ‘no’ で答えた場合の容認度を調査した。

(14) A: Wahnsinn! Was für schwierige Matheaufgaben Katrin lösen kann!

madness what for difficult math.problems Katrin solve can

‘Man! What difficult math problems Katrin can solve!’

B: Nein, sie schlägt immer im Lösungsbuch nach.

‘No, she always looks the solution up in the textbook.’

(Trotzke 2019: 529)

Trotzke (2019) は(14)の容認度と、(15)のように平叙文に対して *nein* ‘no’ で応答した場合の容認度とで、統計的に差は見られなかったと報告している。

(15) A: Linda hat einen schlaunen Sohn.

‘Linda has a smart son.’

B: Nein, das stimmt nicht.

‘No, that’s not right.’

(Trotzke 2019: 530)

よって、ドイツ語の degree 感嘆文には主張可能性がありそれによって V2 語順が認可されている、と考えることは経験的にも妥当であると言えるだろう。

4. ドイツ語の degree 感嘆文の意味論

本節ではここまでの議論に基づき、ドイツ語の degree 感嘆文の形式意味論を提案する。本発表では紙幅の都合もあり、*was für ein* 感嘆文のみを取り上げる。(16)のような感嘆文における *was für* の意味論として、(17)を提案する³。

(16) Was für ein Auto Peter gekauft hat!

what for a car Peter bought has

(17) $[[\text{was für}]] = \lambda P_{\text{ct}} \lambda Q_{\text{ct}} \exists x. P(x) \wedge Q(x) \wedge [\mu_s(x) \geq \text{THRESHOLD}]$

(17) における μ_s は、個体 x を任意のスケール s にマッピングする関数である⁴。この意味論のもとでは、(16)の意味合成は(18)のように進む。

(18) a. $[_{\text{CP}} [\text{Was für ein Auto}]_i [_{\text{IP}} \text{Peter } t_i \text{ gekauft hat}]]!$

b. $[[\text{was für ein Auto}]] ([[\text{Peter } t \text{ gekauft hat}]])$

$\Rightarrow [[\text{was für ein Auto}]] (\lambda x_e . \text{Peter bought } x)$ (Predicate Abstraction)

$= [[\text{was für}]] ([[\text{ein Auto}]]) (\lambda x_e . \text{Peter bought } x)$

$= \exists x. \text{car}(x) \wedge \text{Peter-bought}(x) \wedge [\mu_s(x) \geq \text{THRESHOLD}]$ (Functional Application)

(18)の分析では、(16)の感嘆文は「車であり、Peter が買ったものであり、任意のスケール s において閾値 THRESHOLD を超えているような、個体 x が存在する」ときに真となる。真理条件として程度の高さが求められているため、*was für ein* 感嘆文が non-degree コンテキストで発話不可であることが正しく予測される。なお、(17)のように degree 感嘆文の *wh* 句に疑問文の *wh* 句とは別の意味論を想定することは、一見アドホックに思える。しかしながら、(19)~(21)で見られるように、疑問文あるいは感嘆文に使用が限定される *wh* 句の存在は通言語的にも観察されている。具体的には、ドイツ語では屈折語尾をもつ *welch(er)* ‘which’ は感嘆文では使うことが出来ず(19)、イタリア語・日本語では形容詞を伴う *che* ‘which’ やナンテを疑問文で使うことが出来ない(20)(21)。よって、感嘆文の *wh* 句に疑問文の *wh* 句とは別の意味論を立てることは的外れではないであろう。

(19) ドイツ語 (Wiltschko 1997: 114)

a. *Welch ein Mann!*

which a man

‘What a man!’

b. **Welcher Mann!*

which.M.SG.NOM man

(20) イタリア語 (Zanuttini & Portner 2003: 66)

a. *Che alto che è!*

which tall that is

‘How very tall he is!’

b. **Che alto è?*

which tall is

³ 形容詞を伴う感嘆文を扱う場合、オントロジーに程度 degree を導入した上で *wh* 句の意味論を想定することになるが、紙幅の関係から詳細は割愛する。

⁴ 任意のスケール s は μ_s が項に取る個体 x の内在的な性質によって決まるため、「予想外さ」のスケールは排除される。

- (21) a. なんて美しいの(だ)！
 b. *なんて美しいの？

さて、本発表の提案において注目すべきは、(18)の分析では *was für ein* 感嘆文が命題 proposition を指示 denote しているという点で、これは感嘆文は疑問文と同じく命題の集合 set of propositions を指示するとしている多くの先行研究 (d'Avis 2001, Zanuttini & Portner 2003, Roguska 2007, Castroviejo Miró 2010, Repp 2013, Balusu 2019 など) とは異なったものとなっている。次節では、少なくとも degree 感嘆文に関しては、これらの先行研究のように命題の集合として分析するよりも、本発表のように命題として分析の方が経験的に優れていることを示す現象を紹介する。

5. degree 感嘆文を命題として分析することの利点

(22)で示すように、*denken* ‘think’ は命題を項に取る典型的な述語であり、命題の集合である疑問文を埋め込むことはできない。

- (22) a. Ich denke, dass er kommt.
 I think that he comes
 b. *Ich denke, wer kommt.
 I think who comes

もし degree 感嘆文が命題を指示しているとすれば、*denken* ‘think’ に埋め込むことが可能であるという予測になる。そして実際、degree 感嘆文である *wie*+形容詞感嘆文(23)、*was-für-ein* 感嘆文(24)、*welch-ein* 感嘆文(25)、*w+alles/überall* 感嘆文(26)のいずれに関しても、*denken* に埋め込まれている実例が存在する。

- (23) Keiner von uns hätte **gedacht, wie überaus gut das Schlagwort passt**, als die Neuwahlen gerade
 nobody of us have.CONJ thought how very good the slogan suits when the new.election just
 fest standen und...
 be.fixed and <https://www.mainpost.de/regional/schweinfurt/mer-steckt-net-drin-in-der-politik-art-3337006>
- (24) Voller Vorfreude, hätten wir zu Beginn des Tages nie **gedacht, was für ein tolles Ergebnis am
 full anticipation have.CONJ we at beginning of.the days never thought what for a nice result at.the
 Ende heraus kommt.**
 end out comes <https://www.goldschmiede-biedermann.de/trauringe-selber-schmieden/gaestebuch>
- (25) Ich habe in den letzten Wochen mehrmals **gedacht, welch ein Luxus es für mich ist**, in einem grossen Haus
 I have in the last week repeatedly thought which a luxury it for me is in a big house
 mit Garten leben zu dürfen.
 with garden live to be.allowed <https://www.ref-flawil.ch/gedankenzumsonntag11>
- (26) Wer hätte **gedacht, was man doch alles zuhause machen kann**. Mein Fitness-Studio kommt zu mir ins
 who have.CONJ thought what man PRT all at.house do can my fitness.studio comes to me in.the
 Wohnzimmer.
 living.room <https://ne-np.facebook.com/dr.ingridhoermann/posts/2240216862942000/>

さらに、d'Avis (2013)による埋め込み感嘆文に関する観察も、本発表の分析によってうまく捉えることができる。d'Avis (2013)によると、(27a, b)の感嘆文をそれぞれ *herausfinden* ‘find out’ に埋め込んだ場合、(28a)には埋め込み感嘆文の読みがある一方、(28b)には埋め込み疑問の読みしかないという。

- (27) a. Wie überaus schnell Maria laufen kann!
 マリアはなんて速く走れるんだろう！
 b. Wen Maria geheiratet hat!
 マリアが結婚した人には驚いたよ！
- (28) a. Heinz hat herausgefunden, wie überaus schnell Maria laufen kann.
 Heinz has found.out how very quickly Maria run can
 ハイイツはマリアがなんと速く走れるかを見出した。

- b. Heinz hat herausgefunden, wen Maria geheiratet hat.
 Heinz has found.out who Maria married has
 ハイイツはマリアが誰と結婚したかを突き止めた。

本発表の分析では、(27a)は degree 感嘆文、(27b)は non-degree 感嘆文である。non-degree 感嘆文に関しては、先行研究にならぬ疑問文と同様に命題の集合を指示すると仮定する。(28a)のように degree 感嘆文を埋め込んだ場合、埋め込まれた命題が真理条件として高い程度性を要求するため、埋め込み感嘆文の読みが出る。一方(27b)では命題の集合が埋め込まれているため、埋め込み疑問文の読みとなる。

6. おわりに

以上本発表では、ドイツ語における degree 感嘆文 (wie+形容詞感嘆文・was-für-ein 感嘆文・welch-ein 感嘆文・w+alles/überall 感嘆文) が V2 語順を受け付けることを示し、それはこれらの感嘆文が主張可能性を持つことに起因するとした。そして degree 感嘆文は (命題の集合ではなく) 命題を指示 denote すると提案し、その分析を経験的に支持する現象を示した。一部の感嘆文に関して、①命題を指示していること、②主張 assertion になり得ること、を示した本発表の結論は、感嘆文は疑問文と同じく命題の集合を指示していると想定しつつ感嘆文独自の発話力を認める多くの先行研究 (d'Avis 2001, Zanuttini & Portner 2003, Roguska 2007, Castroviejo Miró 2010, Repp 2013, Balusu 2019 など) の方向性に再考を促すものである。

参考文献

- Antomo, M., & Steinbach, M. (2010). Desintegration und Interpretation: Weil-V2-Sätze an der Schnittstelle zwischen Syntax, Semantik und Pragmatik. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 29, 1–37.
- Balusu, R. (2019). The role of the particle -oo in wh-exclamatives in Telugu and Kannada. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 23, vol. 1, 109–126.
- Castroviejo Miró, E. (2010). An expressive answer: Some considerations on the semantics and pragmatics of wh-exclamatives. *Proceedings of the Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society 44 (CLS 44)*, 3–17.
- d'Avis, F. (2013). Exklamativsatz. In J. Meibauer, M. Steinbach, & H. Altmann (Eds.), *Satztypen des Deutschen* (pp. 170–202). Berlin: Walter de Gruyter.
- d'Avis, F.-J. (2001). Über 'w-Exklamativsätze' im Deutschen (*Linguistische Arbeiten* 429). Tübingen: Niemeyer.
- Fries, N. (1988). Ist Pragmatik schwer!—Über sogenannte 'Exklamativsätze' im Deutschen. *Sprache und Pragmatik*, 3, 1–18.
- Fujinawa, Y. (2011). Wo sich Synchronie und Diachronie überschneiden: Eine (Rand-)Bemerkung zur Verbstellung im Gegenwartdeutsch. In M. L. Kotin, & E. G. Kotorova (Eds.), *Geschichte und Typologie der Sprachsysteme* (pp. 129–138). Heidelberg: Winter Verlag.
- 伊藤克将. (2018). ドイツ語の w 感嘆文における動詞の位置とその意味論. 『言語情報科学』 16 号, 1–17.
- Meinunger, A. (2004). Verb position, verbal mood and the anchoring (potential) of sentences. In H. Lohnstein, & S. Trissler (Eds.), *The Syntax and Semantics of the Left Periphery* (pp. 313–341). Berlin: de Gruyter.
- Reis, M. (2013). „Weil-V2“-Sätze und (k)ein Ende? Anmerkungen zur Analyse von Antomo & Steinbach (2010). *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 32(2), 221–262.
- Repp, S. (2013). D-linking vs. degrees: Inflected and uninflected *welch* in exclamatives and rhetorical questions. In H. Härtl (Ed.), *Interfaces of Morphology* (pp. 59–89). Berlin: de Gruyter.
- Rett, J. (2011). Exclamatives, degrees and speech acts. *Linguistics and Philosophy*, 34(5), 411–442.
- Roguska, M. (2007). *Exklamation und Negation*. Doctoral Dissertation, Universität Mainz, Mainz.
- Rosengren, I. (1992). Zur Grammatik und Pragmatik der Exklamation. In I. Rosengren (Ed.), *Satz und Illokution, Bd. 1* (pp. 263–306). Tübingen: Niemeyer.
- Stalnaker, R. C. (1978). Assertion. In P. Cole (Ed.), *Syntax and Semantics 9: Pragmatics* (pp. 315–332). New York: Academic Press.
- Trotzke, A. (2019). Approaching the pragmatics of exclamations experimentally. *Proceedings of the Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society 54 (CLS 54)*, 527–540.
- Trotzke, A., & Giannakidou, A. (2019). Exclamatives as emotive assertions of intensity. Ms. lingbuzz/004838.
- Truckenbrodt, H. (2006). On the semantic motivation of syntactic verb movement to C in German. *Theoretical Linguistics*, 32, 257–306.
- Wiltschko, M. (1997). D-linking, scrambling and superiority in German. *Groninger Arbeiten zur germanistischen Linguistik*, 41, 107–142.
- Zanuttini, R., & Portner, P. (2003). Exclamative clauses: At the syntax-semantics interface. *Language*, 79(1), 39–81.